おかげさまで
ジェイエイ北九州くみあい飼料株式会社は、
創立50周年を迎えました。

当社は、昭和39年設立「長崎協和飼料株式会社」、昭和41年設立「大分協和飼料株式会社」と昭和42年設立「福岡くみあい飼料株式会社」、昭和46年設立「熊本くみあい飼料株式会社」が合併し、**存続会社である「福岡くみあい飼料株式会社」の設立から、平成29年7月に50周年を迎えることができました。**

これもひとえに、生産者の皆様、農協、経済連、全農の皆様、また取引先の皆様の、日ごろからのご支援によるものと、心より感謝申し上げます。

気持ちを新たに、役員・社員一同、生産者の皆様に奉仕する心で、配合飼料のコスト低減、品質向上、営農サービスの実践に取り組み、地域と密着した事業活動に取り組んで参ります。

安全・安心を提供する
皆様に信頼され、選ばれる企業へ
ジェイエイ北九州くみあい飼料株式会社は、これから50年先の創立100周年を目指します。

TOP Interview

代表取締役社長

谷 清司

Kiyoshi Tani

発展へ向けて新たな取り組みへ挑戦、
生産者の皆さまと共に
成長していきたい。

創立50周年を迎えた、ジェイエイ北九州くみあい飼料株式会社。これまでの50年の歴史の振り返りや、今後のさらなる成長を見据えた新たな取り組みなどについて、谷社長に話を聞いた。

社員が安心して仕事ができる環境づくりへ

――社長に就任して一番大切にしてきたことは何ですか。

会社を維持、存続させるために何をするべきか、これを第一に考え、実行してきました。

会社の存続のためには、ＪＡグループや生産者の皆さんからの信頼が得られる仕事をすること、社員の皆さんが健康で安心して仕事ができる職場環境を作っていくことが大切です。

一方、社会環境が変化する中で、会社を存続するために、現在の仕事内容も改良していかなければなりません。さらに新しい取り組みも必要です。社会的な信頼を勝ち得るために、社会貢献も必要です。こうしたことを役員や社員の皆さんと一緒に話し合いながら、今後、具体的に実践していきたいと思っています。

――ずばり、「ジェイエイ北九州くみあい飼料株式会社」とはどんな会社でしょうか。

生産者の目線で配合飼料を作って、販売させていただくという会社です。ＪＡグループの一員であるため、協同組合精神が高い株式会社だと思います。

もともとは配合飼料の委託加工を行う会社でしたが、平成14年に全農から飼料事業の移管を受け、配合飼料の原料の買い付けや、配合飼料の販売もするようになりました。全農、経済連や関係会社の職員・社員の人たちにも社員として参画していただき、従来のプロパー社員とともに仕事をすることになりました。そこには協同組合の精神が息づいていると思っています。

さらに現在では生産基盤の確保のために、子会社を通じて農場を築いていく仕事にも新たに参画し、会社の仕事の幅も拡がりました。これらの農場では、牛・豚・鶏卵の生産を行っています。現在では、「生産者の皆さんと共に創り上げていく飼料会社」として、成長していっているのではないかと思っています。

新商品開発の努力と達成の先にある感動

――入社して今日まで、感動したこと、思い出に残るエピソードは。

感動は、日常の仕事の中から生まれてきます。生産者の皆さんと一緒になって新しい商品を開発し、それが出来上がったときは、自分たちだけではなくて、生産者の方と一緒に感動します。また、新しいユーザーと新たな取引ができることになったときもそうです。

おいしいお肉を作るために、「こんな配合飼料を使ったらいいのでは」と考えるのですが、すぐにはできません。何度もやっていくうちに少しずつ考えに近いような商品ができていきます。時間をかけて、最終的に完成し、ようやく一般の消費者から「おいしい」という評価が得られます。満足のいく結果にならない場合も多いのですが、自分たちの思いが達成されると、すごく感動します。

その他には、新入社員が成長した姿や、先輩が退職されて、今までのことを話されるときなどにも感動を覚えます。日頃、一緒に仕事している社員と連携し、取り組んでいる仕事の中の一つひとつが感動の要素を生むのだろうと思っています。

――社員とのコミュニケーションの中で、印象に残っていることは。

一番は春の花見です。福岡工場の入口に、工場操業から間もなく植えられた桜の木があります。ちょうど新しい年度を迎えるときに、まるで祝福してくれるみたいに満開になります。

春になると、当社の社員はもちろん、近隣の会社や取

引先の会社、ときには生産者の方もお見えになって、盛大に花見を行います。当社の歴史の中でも欠かせない行事の一つで、雨が降ってもテントを張って開催するんです。

このお花見は、私にとって、非常に深い思い出になっています。きっと社員の皆さんの心の中にも刻まれているのではないでしょうか。

チームとして課題を解決 そこに一番の成長を感じる

――会社が成長したなと感じるのはどのようなところですか。

平成14年に全農から飼料事業の移管を受けた当時、飼料製造部門と営業部門の意思疎通がなかなか図られておらず、決して仲の良い状態とは言えませんでした。

当社のプロパー社員に加え、全農、経済連や関係会社の職員・社員やOBが短期間に集まった会社でしたから、それぞれの立場や仕事の性質の違いなどが原因で、仕事がとてもやりにくかったのだと思います。

それからおよそ15年が経ちましたが、今はみんなが一つになって、チームとしてさまざまな課題を解決できるようになりました。そこが一番成長したなと思うところですね。社員の皆さんも相当努力されてきたと感じます。

また生産者の方からも、当社の製造や営業に対して、たくさんご意見をいただきました。そうした周りの皆様からの応援のおかげで、ここまで成長できたと思っています。

――会社や業界を取り巻く環境をどうお考えでしょうか。

飼料業界は、畜産物価格と、飼料の原料となる穀物価格に大きく影響を受けます。畜産物価格が下がると、生産者の経営が厳しくなってきます。ここ2・3年は、どの畜種も畜産物相場が比較的高く推移していますが、海外からの畜産物輸入量の変動もあり、畜産物価格の動きは予断を許さない情勢にあります。一方の輸入を主とする穀物価格についても、地球環境の変化などにより、長期的な安定は期待できそうにありません。

それに加えて、日本の人口減少は確実に進んでいます。畜産物の消費の低迷は避けられず、生産量も減少していくと思われます。

そのような中、飼料製造だけが現状維持することはあり得ません。それぞれの環境に沿って、変わっていかなければならないと思っています。

農場経営を拡充し 新たな生産基盤構築へ

――そんな中、今後どのような対策をお考えですか。

今、生産者は比較的高齢な方が多く、また畜舎などの施設も非常に古くなってきています。更新時期ということで、辞めていく生産者も多いのです。減少する消費に先んじて、畜産物生産が低減し、需要を満たせなくなる可能性があるのではないか、と私は感じています。

需要に応じた生産基盤を維持することは、ＪＡグループはもちろん、当社にも強く求められることです。現在、当社では子会社を通じて農場経営に参画していますが、今後それをさらに拡げていき、生産者の皆さんと一緒になって新たな生産基盤を築いていきたいと考えています。

ＪＡグループで連携して生産基盤を拡充し、その需要に応え得る優良な飼料の販売を当社が担う。当社で作る配合飼料だけでなく、地域でできる自給飼料を含めた、飼料としての利用体系の確立も大切です。効率的な使い分けの工夫も必要となるので、WCSやTMRなどの生産にも参画することになります。

また、敷料など畜産生産に必要な資材についても検討が必要となってくるでしょう。従来のように配合飼料を作って販売していくだけではなく、業態をさらに拡げていく必要があると考えています。

――社員に向けてメッセージを。

飼料業界を取り巻く環境の変化に応じて、当社の仕事内容も変わりつつあります。それは社会情勢が求める要求でもあるし、生産者の方が希望するものでもあると思います。

会社のあり方、方向性、新たな取り組みについては、役員・社員で一所懸命協議を行い、検討を重ねながら創り上げていきたいと思います。ぜひ、社員の皆さんのご協力をお願いしたいと思います。